

論壇時評

中 嶋 嶺 雄

〈下〉

「メリハリの効いた政治」への不安

「メリハリの効いた政治」を標榜する中曽根政権が登場して三月。首相自身は、三十有余年、政権を担ったことのみを念願してきたといわれるだけに、中曽根丸はエンジンも高く始動したかに見えるが、果たして先行は大丈夫か。

今月の論壇は政局にかんする論議が賑わっている。その一つは、中曽根政権論であり、二つは、ロッキード球刑に関連した田中角栄論であり、三つは、中川一郎の「怪死」をめぐる議論である。

中曽根政権にかんしては、桂木浩一「中曽根政治への期待と恐れ」(経済往来)、「週刊東洋経済」(二月二十二日号)の「野田会」(徳意の復讐)は、首相の外交感覚」(今週の問題)が、ともに中曽根政権の内外政治に対する国民の不安を代弁している。

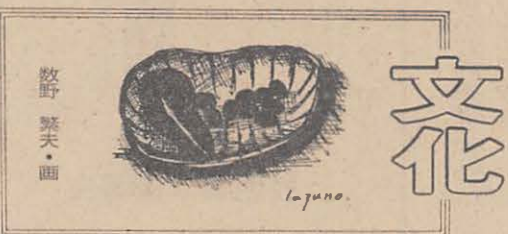
そのほか、中曽根政権の本質を抉ったものとしては、山口定「中曽根政権の位置と本質」(世界)が屈指の力作である。山口は、中曽根派を「高流」(福田派)のゆきしまと

鋭い嗅覚による指摘

▲ 山口定「中曽根政権の位置と本質」

野坂昭如「田中角栄の俗と聖」▼

期待にたがわぬ角栄論



数野 繁夫・画

度経成長期の官僚エスタブリッシュメントの主流(大蔵・通産省)からはずれた戦中派ナショナリスト集団」として位置

「メリハリの効いた政治」と

て、「新しい軍部官僚、一部のタ力派外務官僚の胎動」をほくも指摘している点は、実に鋭い嗅覚だといわねばならない。私は、多くの点で山口の考え方と異なった見解に立つ者であるが、中曽根政権論としてはぜひ推挙したい好評論であった。

「欲望の政治学」の当然の帰結に怒り

次いで田中角栄論としては、伊藤昌哉「宰相の志とは何か」(Voice)がやはり光っている。かつて池田勇人首相の首席秘書官をつとめ、大平正芳の友としても知られた伊藤は、今

は「暴走」政治にほかならず、「わかりやすい政治」とは危険きままりない「過度の単純化」の政治にほかならないと山口

「求刑で」田中支配は「どう変わる」を論述している。右の「Voice」論文で伊藤は、田中

派は河合塾のようなものだ。多くの愛護者を集めて代議士にし、さらに政務次官にし、常任委員長にし、大臣にする。きわまるころ、総理大臣までつくってしまった」と述べ、「欲望の政治学」の当然の帰結にたいして腹立たしさを表明している。

だが、田中角栄論には、別の角度からの切り込みも必要である。この点で野坂昭如「田中角栄の俗と聖」(中央公論)は、期待にたがわぬ文章であった。野坂は、ロッキード事件に

かんしても、「聖なる存在を、たむきすり下すためだけに、そのことで自分の罪を免がれた」がために、われわれは厭いでいるのではないか」といっている。そして、田中さんには必要な存在であった。そして、田中さん

は「新瀧三郎の雪の深さ、夜国夫・中川一郎の死の三角関数の真相」(現)がともに、その立論の核心に迫る「(週)内藤を監視すればするほど、中曽根の暗さを」知っている野坂のネホリズム(地獄主義)に由来するなぞをいっまい。日本が「死」を逐(お)っている。

黒板

(東大教授・国際関係論)